

団長の心のものさし

第35回音楽会
2ヶ月前特集

出席率は合唱団の実力

9月5日に開く第35回音楽会まで残すところ、ちょうど2ヶ月になった。昨年12月に開催予定で準備してきたが、諸般の事情でやむなく延期。うたおに音楽会の歴史を振り返っても、このようなケースはなかった。そのことが結果として、新しいメンバーを含めた“新生うたおに”としてのデビュー公演となるだろう。(詳細は第13、14、15号を参照)

.....
そのような状況の中、うたおには最近、出席率がいい。通常も決して危惧するほど悪いわけではないが、もともとメンバーが多いわけではな

いので、一人一人の意識が高いことがうたおにの強みだ。どうしても休みがちになるメンバーは固定されてくる。もちろん“ズル休み”などは存在しないはずだから、何か事情があるのだろう。そんなメンバーも出席しているから、結果的にほぼ全員が揃っていることになる。出席がすべてとは言わない。しかし、その合唱団の実力を図る上で、一定のパロメーターにはなるだろう。それは合唱がアンサンブル音楽であるからだ。

音取りが出来て、いい声が出ればいい...こんな考え方が許容されている



うたおにの練習の休憩は長~い

合唱団は意外と多い。うたおににもかつてはその傾向の強い時期があった。

たしかに、専門的に音楽を勉強していない、あるいは合唱経験がないなど、いわゆる素人が多数を占める合唱団では、音が取れる、いい声

が出るといった力は、歓迎に値するだろう。そこまでは理解できる。しかし、だからといって本番直前にちょこっとやって来てアンサンブルに加わるには疑問が残るのである。

アンサンブル時間の確保 お互いに関心を持つこと

うたおにの良さは、素人の集まりであることを楽しんでいるところだ。優越感を持ったメンバーの集まりではない。いつも上昇志向で物事を捉えることが出来る、ポジティブな集団でありたい。だからこそ週2回の練習は、練習時間の確保のためにあるのではなく、幅広い活動を可能にするための礎に変わった。

週2回の練習を定例化している合唱団は少ない。創立以来、このスタイルを維持して来たことは、今となっては奇跡に近い。しかも、その2回の練習が、団としては活動の推進力に、個人としては補完的な役割も果たしているようだ。あらゆる可能性が大きくなるのだ。個人個人の生活スタイルの中で、合唱活動がどれほどの割合を占めているのか、それは個人差のあることだ。それにしても、週2回は無条件にその割合を重くしている。定例であることは、習慣化することに他ならない。うたおにのメンバーは、知らず知らずに合唱生活に深く入り込んでいるのだと思う。辞めることも、もちろん自由だ。でも定着率も高い。おそらく居心地がいいのだろう。その居心地の良さはみんなで作り上げるものだ。

みんなが揃ってアンサンブルする時間を多く取れるということは、メンバー同士がお互いに関心を持って活動できる可能性を大きく広げている。しかも音楽を通じてだ。

周囲に関心を持つということは、それを前向きに捉える集団では、居心地の良さを築き上げることが出来る。逆もまた真なりだ。しかも、その関心の持ち方が、音楽を通じて機能すれば、人間特有の感情に左右されずにすむのである。そう、いわば“戦友”のような関係なのだろうか。

こんな関係が続くのであれば、おそらくうたおには強くなれるだろう。戦友は心と命を預け合うからだ。

うたおにの7月1日(木)の様子

練習内容
Ave maris stella
The Lord bless you and keep you
Geistliches Lied Op.30
鶴
世界の約束

もう7月。早い！ドリームコンサートで幕開けした今年のうたおにの活動もあと半年。

本日も全員出席にあと一歩。残念ながら2人欠席だった。こうして音楽会へ向けた機運が上がっていくといいのだが...

しかし変われば変わるものだ。「鶴」のような歌を熱く歌えるようになった。さすがだね。

アンサンブルが生む感動を！

“アンサンブル、”...いつも何気なく使うこの言葉には、本当に深いものを感じる。なぜ自分が合唱活動にのめり込み、続けているのかを振り返りながら、アンサンブルすることの意味を探りたい。来たるべく音楽会で最高のパフォーマンスを披露できることを願って。



チームプレイと個人技が融合した最高のパフォーマンスをみせるドイツチーム

私たちが合唱活動を通じて考えられるアンサンブルには、精神的な面と技巧的な面の二面性がある。いずれも必要不可欠な側面だ。それと自力と他力だ。私たちの周りには、このアンサンブルに欠くことの出来ない要素を確認できるパフォーマンスがいくつも存在している。これらは必ずしも音楽に限ったことではない。スポーツでもチーム競技には、このアンサンブル感が強く映し出されている。

ドイツチームが見せる新しいスタイルの強さ

このアンサンブルの巧さを見せるパフォーマンスを、多くの人々が目の当たりにした。それがW杯南アメリカ大会だ。

サッカーはチーム競技でありながら、これまでの有力チームは、そのほとんどをスター選手の個人技に頼ってきた。そんなサッカーが大きく変貌したのが今大会だったように思う。その新しいスタイルでの強さを見せつけたのがドイツチームだ。

世代交代を果たし、スター選手がほとんど居ない状況で、およその予

想を裏切って優勝候補チームに圧勝してきている。その戦いぶりは、ドイツと言うお国柄の通り、まさしく集団的戦略だ。的確な状況判断で、誰が何をするかを見極める。その見極めによって行動する。誰かが優れたパフォーマンスを見せるために動くのではない。そこには個を犠牲にしている様子など微塵もない。そこが日本チームとは“差、”として表れている。結果、誰かのアシストがチームメイトの最高のパフォーマンスを演出し、勝利へと導いているのだ。

昔も今も変わらぬ最高のパフォーマンス キングス・シンガース

私たちの合唱活動に、より身近に捉えることが出来るパフォーマンスとして、優れた声楽アンサンブルの演奏がある。その一つがイギリスを代表するグループ“ザ・キングス・シンガース、”だ。彼らが誕生して40年になるが、メンバーチェンジを繰り返しながらも、そのハーモニーは色褪せていない。一つのステージでルネッサンスの古い作品から現代、民謡、ポップス

まで、ありとあらゆるジャンルの歌をアカペラで歌う。また、その国の言葉で作品紹介をしたり、顔と体、そして声の色で、多種多様な表現を見せる。最高のエンターテインメント性を備えたアンサンブルグループだ。作品に対する造詣の深さ、歌うことへの執着、呼吸感を楽しむ姿勢...アンサンブルに対する姿勢のどれもが兼ね備わっている。そして、それを具体化するためのテクニックは並外れている。

彼らは、すべてのメンバーが必ずしも美声であるとは言えないだろう。実はそのことが、彼らのサウンドを固有のものとしているのだ。他に類を見ない。だから音色の統一感を感じない。ピッチとリズム、そしてそれらを支える呼吸だ。私たちが学ぶべきアンサンブルの要素はここに凝縮している。

.....

多くの合唱団が声の色を揃えようとするが、うたおには色の違いを楽しめる合唱団でありたいと願っている。アンサンブルを脱色させずに、演奏する作品にマッチした色を付けたいのである。しかも特殊な場合を除いて、あまり濃い色付けはしない。聴き手を、一つの色で縛り付けない、出来る限り淡い色付けを施したいのだ。

こうした演奏は敬遠されがちだが、このサウンド作りが、これから先、主流になっていくことは間違いないだろう。主張はあるが押し付けない。押し付けていないが、確信を持った歌をうたう。とても難しいことだ。

これぞアンサンブルの極みだ。



一人一人の確立した歌で絶妙の演奏をするキングス・シンガース